



瀬倉正克部長



石垣徳洋監督



鈴木将平主将



下級生の活躍も鍵を握る。スキッパー角野貴哉(情報2)とクルー林宏卓(法1)



紫紺の勇者たち *Heroes of the Meiji*

第37回 ヨット部

—明大体育会の系譜—

文・撮影／菊地武顕
写真提供／松本和久 明大スポーツ新聞

悲願のインカレ総合Vへ
コミュニケーションを重視して

昨年のチームが始動したとき、大いに期待がもたれた。というのも例年ヨット部では、高校時代の経験者と未経験者ががだいたい半数ずつ混在しているのだが、昨年は経験者を多数擁していたからだ。

学生ヨットのレースは、470級とスナイプ級（ともに2人乗り）の2クラスで行なわれる。明治はこれまで全日本インカレでクラス優勝を3回経験しているが、両級を合わせた総合成績では準優勝が2回あるだけで、まだ優勝の経験はない。

悲願である初の総合優勝を目指し練習に励んでいたのだが……。結果は真逆に出た。

なんと470級は関東インカレで8位に終わり、全日本インカレに出場できなかったのだ。スナイプ級は全日本に出場したが、7位という不本意な成績に終わった。

今年で就任3年目の石垣徳洋監督は、前年の反省を踏まえて語る。

「昨年はいい選手が多かったんですが、力のある選手におんぶにだっこ状態でした。勝つためには、一人ひとりにしてあげています」と、心がけている。

とりのスキルを高めて、総合力を上げていくしかない」

コミュニケーションが成績を左右する

「経験者と未経験者ががペアを組むことが多く、どうしても未経験者に負荷がかかってしまいます。2人のコミュニケーションが重要なんですが、これが難しい。相手を怒鳴りつけても速くなるわけはありませんから、話し合うしかない。でも、なかなかペアでしっかりと言い合えません。経験者の方が、どうすればうまくコミュニケーションを取れるか考えることが重要です」

今年の主将の鈴木将平（商4・逗子開成）は、インターハイでデュエット6位、ソロ11位の実績を持つ。2年生の未経験者とペアを組むが、「相手が言いづらいような雰囲気にならないように、『思ったことは言うように』、『ちゃんと意見を言うように』と伝え、向こうの考えを聞き出

海洋部国防訓練部帆走班

ヨット部の誕生は、戦中のこと。昭和16年、第8回関東学生ヨット選手権に出場した記録が残っている。これ以前から活動していた形跡はあるものの詳細は不明なため、この出場をもって部の発足としている。

戦時色濃厚な世相を反映して、当時の正式名称は「海洋部国防訓練部帆走班」。学徒出陣で部員が戦地に送り出され、創部3年目の昭和18年には活動を完全に休止した。

戦後の復活については、それに携わった前田昭夫（故人）が、『創部50周年記念 明治大学体育会ヨット部沿革史 白雲』に寄稿している。

それによると、前田が知人である日本大学ヨット部員に誘われて日大の艇に乗ったことがきっかけだった。明治にもヨット部を創ることを勧められた前田は、創部に奔走。学生ヨット連盟と明大体育会に正式加盟を認められ、昭和24年4月に掲示板を利用して部員を公募したところ、150余人も集まったために整理に一苦労したという。

同年の夏合宿はまだヨットを持つ

新合宿所の銘板を越えろ

ていなかったもので、7月に日本大学の艇を、9月に法政大学の艇を借り、それぞれ横浜の蓮光寺で行なった。昭和33年に関東インカレで4位に入り、初めて全日本に出場した。

全日本で最初のクラス優勝（スナイプ級）を挙げたのは昭和45年。昭和54年にやはりスナイプ級で、昭和62年に470級で優勝を果たした。

しかしクラス優勝はこれ以降、達成できていない。総合成績では、昭和58年と62年の準優勝が最上だ。

昨年8月、葉山に新しい合宿所が完成した。「明治大学体育会ヨット部合宿所」の文字が刻まれた銘板は、OBで陶芸家の中里太亀が焼き上げた唐津焼。中里は、全日本の470級で優勝、総合準優勝の快挙を成し遂げた昭和62年の主将である。

文武両道を掲げているヨット部では学業が重視されている。年間180日行なわれる合宿に、部員全員が揃わない日も多々ある。

とはいえ合宿所は、部員同士がコミュニケーションをはかる絶好の場所。銘板を焼いてくれた先輩以上の成績を残すべく、頑張っている。（文中敬称略）